

4章 前近代テーマ史 I

添削課題

解答例

西ヨーロッパでは、イギリスの首長法発布やプロイセンの領邦教会制の採用、フランスのナントの王令廃止に見られるように、絶対主義国家は教会組織を支配下に置いた。一方で、様々な信仰を持つ中産市民階級を確保する上から、個人の信仰を許容する国家も現れ、イギリスやプロイセンでは宗教寛容令が出され、オランダではユダヤ人が保護された。西アジアでは、政教一致の体制が維持されたが、異教徒に対してはジズヤの支払いを条件に信仰の維持を認め、オスマン帝国はミット制を採用してある程度の自治を認めていた。一方で、スンナ派オスマン帝国とシーア派サファヴィー朝が激しく抗争するなど、国内外で宗派間対立が起こっており、完全な信仰の自由は実現していなかった。東アジアでは、国内の宗教勢力が反政府的行動に及ばない限り、信仰には不干渉であった。清はチベット仏教を信仰するチベットやイスラーム教を信仰する新疆などを理藩院の下で間接統治し、ダライ＝ラマやベクなどの在地の宗教的指導者による自治を認めていた。一方で、キリスト教宣教師たちが政治勢力化すると、禁教を実施、国外に追放するなど強硬措置を取った。このように、西ヨーロッパでは、国家は組織を統制するが、個人の信仰・活動は自由であり、西アジアでは、個人に信仰の選択権はあっても、組織・個人とも強い統制下に置かれ、東アジアでは、政治勢力化しない限り、組織・個人とも信仰・活動は自由であった。(600字)

解説

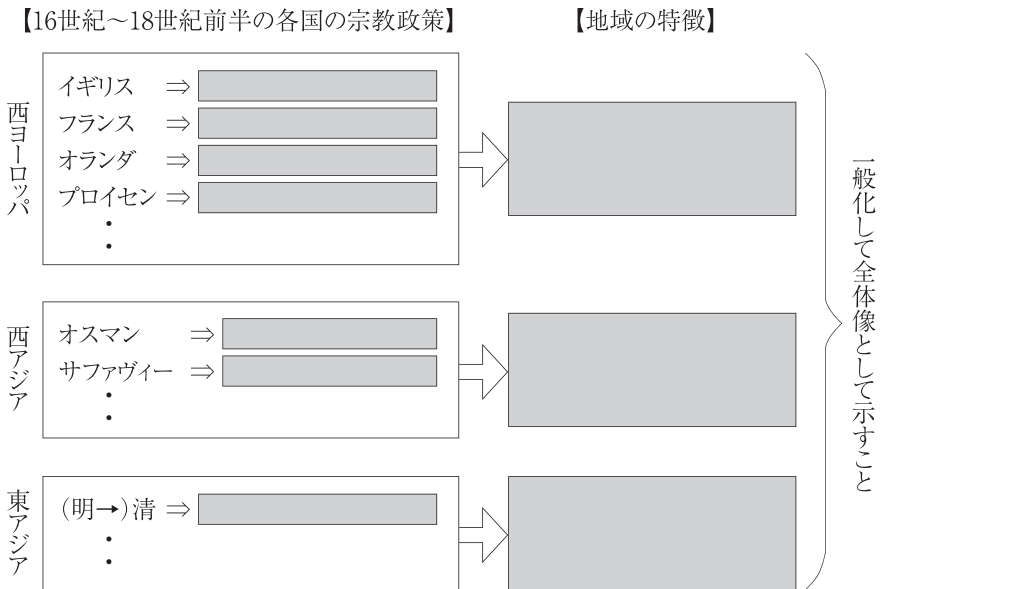
《政治権力と宗教の関係》

2009年度は、16年ぶりに第1問の制限字数が600字となった。そのせいもあってか、テーマも異なる3つの文化圏の歴史展開とその比較という、1980年代から90年代前半によく見られたものが採用されている。異文化圏の接触、衝突、融合は東京大学においては頻出のテーマであったが、今回は「政治と宗教」に焦点を絞ったものとなっている。さらに比較の視点を盛りこまなければならない、受験生にとっては厳しいものであったといえるだろう。制限字数600字以上の設問の場合、上記のようなテーマとともに、特定地域・国家が世界史全体にどのような影響を与えたのかを時系列ごとにまとめる“地域史”に近いものも出題されており、単純な地域・国家の通史の理解だけでなく、地域ごとのつながりや特色の比較、周囲に及ぼす影響などにも注目をしていくよう心掛けてほしい。

まず設問の要求であるが、最終段落の『世界各地の政治権力は、その支配領域内の宗教・宗派とそれらに属する人々をどのように取り扱っていたか』がこれに該当するであろう。この「政治権力」とは「支配領域内の人々を（直接）取り扱うことができる」のであるから、「主権国家」と考えてもよいであろう。したがって主たる要求は「主権国家が実施した宗教政策」と置き換えた方がわかりやすいはずである。このことから、指定されている地域の中で、西ヨ

ロップバに関しては主権国家の登場が16世紀以降となるため、比較の対象としての西アジア・東アジアにおいても同時代の状況で考える必要があるだろう。つまり、ここでは「16世紀から18世紀前半」までの「3地域における主権国家が実施した宗教政策」について「具体例を挙げて」説明し、その「比較」をすることが設問の要求を最大限満たすものと考えらるべきである。ここで注意してほしいのは、比較をする際、特定の一国家が実行した政策のみをその対象とすることはできないということである。なぜならば、設問要求から『この3つの地域の特徴』を比較せよ、となっている以上、具体例から各地域の宗教政策の内容を「一般化」しなければ要求に応えたことにならないからである。

上記の設定をどのように解答に結びつけるかを考えてみよう。細かい条件がついているので、いきなり「各国の宗教政策」を「具体的」に指摘しようとした場合、結果的にそれに終始した解答を作成してしまい、設問要求を満たしきれないまま、制限字数を超えてしまうことが危惧される。字数配分を考える上からも、文章の構造を簡単な図に示すことが必要であろう。



図中のアミカケ部分が解答に示さねばならない部分である。全体のバランスから考えれば明らかかなように、西ヨーロッパ諸国の具体例に多くの文字数を割いてしまうと、うまくまとめきれなくなる。各地域の宗教政策の説明を150～160字程度、特徴の比較を120～150字程度、とするのが妥当なバランスではないか。

次に、各国の宗教政策について考えてみよう。ここでの注意事項は、政策の対象に「宗教（組織）」そのものだけでなく、「信者＝個人」が含まれている点である。単に国家として「単一の宗教を選択した」、「組織を支配下に置いた」だけでは不十分であり、それが「個人」に対しても実行されていたのかを、しっかり確認しなければならない。以上の観点から、各国の状況についてまとめてみよう。

まず、西ヨーロッパであるが、概略を挙げれば以下の表のようになるであろう。

国名	宗教そのものまたは組織	個人
スペイン	カトリックを選択・強制	信仰の自由なし 異教徒・異宗派は排除
オランダ	とくに干渉せず	信仰は自由
イギリス	国教会制度により国家が管理	異宗派が混在し、信仰はある程度自由
フランス	王家はカトリックを選択	ナントの王令前後で大きな差異がある
ドイツ (プロイセン)	国家が組織を管理（ルター派）	異宗派を受け入れ、信仰はある程度自由

さらに、細かく見てみると、スペインではこのような政策から、イスラーム時代に定着していたユダヤ教徒が、東ヨーロッパ諸国やイタリア諸都市、オランダなどに亡命している。これは、イタリア諸都市やオランダが個人の信仰には干渉していないことを間接的に証明していることになる。イギリスでは、首長法・統一法の制定により国家が宗教組織を管理したが、ピューリタン革命が発生したことからも明らかなように、国教徒以外の各宗派の信者が国内に居住していた。名誉革命後に信仰寛容令が公布されたことから、個人の信仰の自由は認められていたことになる。フランスでは、ナントの王令によりほぼ完全な信仰の自由が認められたが、ルイ14世がこれを廃止して以降、国内の異宗派（おもにユグノー）は亡命を余儀なくされている。ドイツについては、全体として主権国家とはなっていないが、プロイセン・オーストリアは考慮に入れても問題がないであろう。但し、オーストリアはその領域や進出方向が東ヨーロッパに偏っているので、ここでは外して考える。そのプロイセンであるが、領邦教会制を採用して組織を管理しているが、遅れた商工業を育成するために積極的に異宗派を受け入れている。フリードリヒ2世の時代には、信仰寛容令も公布され、事実上信仰の自由は認められている。以上のような各国の状況から判断すると、西ヨーロッパの特徴は以下のようにとまとめられる。

国家ごとの政策にはバラつきがあるが、総じて主権国家化の流れの中で「宗教とその組織は国家の管理下に置かれ」たが、一部のカトリック国を除けば、主権国家体制の中で国益を優先するという方針の下、「個人の信仰の自由はある程度認められていた」、と判断できる。

次に西アジアであるが、概略を挙げれば以下の表のようになるであろう。

国名	宗教そのものまたは組織	個人
オスマン帝国	スンナ派イスラーム教を採用 政教一致	選択権はあるが、強制改宗も行われる
サファヴィー朝	シーア派イスラーム教を採用 政教一致	選択権はあるが、異宗派は排除

細かく見てみると、オスマン帝国では政教一致の政策の下、イスラーム法（シャリーア）による支配が行われていたが、一方で、ジズヤの納入を代償に異教の信仰は認められ、ユダヤ教徒・キリスト教徒の宗教共同体ミッレトの設置も行われていた。しかし、デウスルメ制に見られるようにキリスト教徒の強制改宗も継続的に行われ、シーア派のサファヴィー朝との抗争が続くなど、全面的に信仰の自由が認められていたわけではない。サファヴィー朝においては、スンナ派オスマン帝国との対抗上国民にシーア派信仰を強制し、国内のスンナ派勢力（ウズベク族など）を追放するなど、ジズヤの納入による信仰の維持といった点はあっても、個人の信仰の自由は制限されていたと考えられる。以上のような各国の状況から判断すると、西アジアの特徴は以下のようにまとめられる。

政教一致の政策の下、「国家と宗教組織は一体」となっている。教義の上からジズヤの納入などによって「個人に宗教の選択権は与えられている」が、国家の方針・都合によって強制改宗や迫害、追放などが行われており、「個人の信仰の自由までもが完全に認められているとは言えない」、と判断できる。

最後に東アジアであるが、概略を挙げれば以下の表のようになるであろう。

国名	宗教そのものまたは組織	個人
(明→) 清	とくに干渉せず、仏教を保護 儒教を統治理念とする	基本的に自由
朝鮮	宗主国の中国に従う	基本的に自由
日本	諸宗教が混在、大きな干渉はない	基本的に自由

細かく見てみると、清の帝室は文殊菩薩を信仰し、儒教を統治理念としていたが、異教に関しては信仰に関する限り干渉は行っていない。内地においてもキリスト教カトリックの布教活動を、彼らが政治分野に介入しない限り許容しているし、征服した周辺民族に関しても、理藩院を通して間接支配するに留め、ある程度の自治を認めていた。その結果、イスラーム教徒から成る新疆、チベット仏教徒から成る内・外モンゴル、チベットにおいて、宗教指導者（ベク、ダライ＝ラマなど）の地位を認め、信仰や宗教活動に関してはほとんど干渉を行っていない。このことは、周辺諸国との関係にも現れており、朝鮮や日本との宗教対立が生じたことはない。つまり、完全とはいえないまでも、個人の信仰の自由は保障されていると考えられる。しかし、キリスト教典礼問題に見られるように、国内の宗教勢力が反政府的行動や政治分野への介入、社会不安を現出させるような場合はこの限りではなく、布教禁止、国外退去などの強制排除を行っている。これらの清の姿勢は朝鮮、日本、ヴェトナムなどにも影響を与えていると判断できる。以上のような各国の状況から判断すると、東アジアの特徴は以下のようにまとめられる。

「組織や集団を国家が直接管理することがなく」、その活動は比較的自由に、「政治勢力化し、反政府的活動を行わない限り」、「組織による信仰活動、個人の信仰の自由は守られていた」、と判断できる。

ここまで述べてきた内容を、先に掲げた図に沿ってまとめることで、設問要求に合った解答を作成できるであろう。

最後に、東京大学の論述問題における「個性」とも言える指定語句の設定について言及しておく。一般的に、論述問題における指定語句は、解答の方向性を示唆する、いわゆる「ヒント」のようなものとらえられがちだが、東京大学の入試においては、必ずしもそうとはいえない。2004年度「銀による世界経済の一体化」、2006年度「戦争の助長要素と抑制要素」などで明らかだが、ある特定部分を説明するのに必要なものばかりを指定語句とし、ほかに指摘しなければならぬ部分があるにもかかわらず、それに関しては一切指定語句を与えない、ということが多々ある。この設問においても、指定語句7つは、いずれも『支配領域内の宗教・宗派』に対して国家が行った政策に関連するもので、『それらに属する人々』をどう扱っていたかを示すものとはいえない。つまり、「個人の扱い」に関しては、受験生が自ら考え正解を導きだして欲しい、という作問者の意図なのであろう。このことを踏まえず、指定語句にあるからといって、『宗教・宗派』に対する説明に終始してしまうと、作問者の要求から大きく外れてしまうことを理解しておいてほしい。

■自習問題

解答例

8世紀頃からダウ船を用いたムスリム商人による海上交易活動が活発化した。彼らは1～2世紀から存在するインド洋交易路や、東南アジア・中国南部をつなぐ海の道を利用し、交易地域を拡大した。唐代以降は、広州などの都市がムスリム商人の来航で発展し、中国南部からムスリムが増えていった。マラッカ海峡は、インド洋世界と東南アジア・南シナ海世界を結ぶ地として重要性を強めた。この地に成立したマラッカ王国が、15世紀にイスラーム化することでインド洋のムスリム商人とも結びつきが強まり、東南アジア島嶼部にはイスラーム教が交易ルートに沿って拡大した。ムスリム商人は8世紀頃にアフリカ東岸にも進出した。マリンディ・ザンジバル・キルワなどの港市にムスリム商人が住みつき、現地のバントゥー語にアラビア語やペルシア語の影響が混じり、スワヒリ語が生まれた。この語は商業用語として東アフリカ地域に広まっていった。(387字)

解説

《イスラーム世界の拡大》

海の道の存在は、『エリュトウラー海案内記』・大秦王安敦の使者の日南来航・港市国家扶南などから考えても1～2世紀に存在していたことは分かる。それをムスリム商人が利用するようになるのは、8世紀頃からである。中国へのムスリム商人の来航は、8世紀に広州に市舶司が設置されたことや、宋代には広州・明州・泉州などに蕃坊が置かれた史実で思い浮かぶはずである。この問題への答えとして書く必要はないが、ムスリム商人が伝えた航海技術や商業技術により、9世紀以降には中国商人が南シナ海での海上交易に乗りだしてゆく。

13世紀のモンゴルの時代に陸海を連環したネットワークが形成されたが、14世紀には地球規模の寒冷化や天災・飢饉・ペストの流行などで、ユーラシア規模での危機にみまわれる。その後、鄭和の遠征に見られるように、15世紀に交易ネットワークは復興する。

鄭和の遠征を契機に明へ朝貢し、タイのアユタヤ朝やジャワのマジャパヒト王国の圧力に対抗し発展したのがマラッカ（ムラカ）王国である。明が15世紀中期以降に北方モンゴル勢力への対応におわれ、鄭和の艦隊も来なくなると、マラッカ王国は香辛料の西方輸出を握るインド洋のイスラーム商人との結びつきを強め、王家もイスラーム教に改宗する。マラッカ王国へ貿易の中心が集中し、ジャワのマジャパヒト王国は勢力を失い、16世紀にはジャワもイスラーム教を受容することとなる。こうして東南アジアにイスラーム教が広まってゆく。

スワヒリ語はイスラーム商人の活動を端的に示す言語である。黒人のバントゥー語の語法構造や基礎語彙に、多くのアラビア語やペルシア語の語彙を加えて成立したのがスワヒリ語である。アッバース朝が健在であった時代にはアフリカ東岸とペルシア湾（バグダード）を結ぶルートが活発であったが、10世紀以降のアッバース朝衰退とカイロの発展を受けて、東アフリカと紅海を結ぶルートが発展した。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。

5章 前近代テーマ史Ⅱ

添削課題

解答例

16世紀前半の新航路の開拓により、ポトシ銀山などの新大陸の銀が大量に流通すると、西ヨーロッパでは商業革命や価格革命が発生し、商工業が発展したことから、エルベ川以東が西欧への穀物供給地となってグーツヘルシャフトが普及、ヨーロッパ経済の一体化が進んだ。16世紀後半から17世紀にかけて、ヨーロッパ商業の中心がアントウェルペンからアムステルダムに移ると、オランダ東インド会社を中心にヨーロッパとアジア・新大陸との交易活動の結びつきが強まった。そのため、インド産の綿織物が各地に流通し、スペインのもたらすメキシコ銀と日本銀の流通により中国では一条鞭法が採用された。その後も大西洋三角貿易を独占したイギリスが、インド産の綿織物を投入して交易を拡大したため、アジアへの銀の流入が続いた。大西洋三角貿易で蓄積した富を背景に18世紀後半にイギリスで産業革命が進展すると、機械製の綿織物をインドに輸出して銀を回収すると共に、中国との交易を拡大した。18世紀末にはインド産のアヘンを中国に密輸することで中国国内の銀をも回収し、イギリスを中心に、銀を交換手段とした循環型の国際交易が発展した。(480字)

解説

《銀を中心とする世界経済の一体化》

「世界経済の一体化の経緯」という近世以降の世界史における定番ともいえるテーマの設問である。東京大学においては、これに類するものとして、1980年度に『いわゆる「地理上の発見」にともなうヨーロッパ人の海外進出は、(略)この出来事の意義を世界史の観点からとらえ、(略)、16世紀末までの変化・変動について、650字以内で述べよ』というものがあり、1989年度には『18世紀半ばから19世紀半ばにいたる時期について、西ヨーロッパ諸国と中国との通商関係の推移を12行以内で述べよ』というものがある。今回の設問は、この2つの過去問を組み合わせただけのようなものとなっている。また、他大学の設問においても類似のものをよく見ることができ、解法をしっかりと把握するとともに、その内容についても十分に理解しなければならないものといえるだろう。

まず設問の要求であるが、後段に明記されているように『世界経済の一体化の流れを概観』するということになる。しかし、ただ漠然と“世界経済”の発展の様子を書くのではなく、『銀を中心とする』経済の一体化という視点が必要である。つまりは、この設問の要求に応えようとするならば、“銀”を利用した経済活動に限定したものでなければならないのである。これ以外に注意が必要なのは、説明の対象が『16～18世紀』と限定されていることである。16世紀における銀の流通に関しては教科書にも説明されており、印象に残っているであろうが、それに終始してしまえば、片手落ちになってしまう。17～18世紀の状況についてもしっかりとまとめなければいけないことに十分な注意を払ってほしい。最後に指定語句に関してだが、東

京大学における大論述問題には、通常8個程度の指定語句が用意されているが、必ずしも解答の指針を与えるためだけに提示されているわけではない。あえて、設問のテーマから外れて見えるものを並べていたり、また、特定の時代の説明にしか使えないようなものを提示していたりする。このような特徴に気付かず、「指定語句を単純に並べて、それなりにまとめた」答案を作成すると、設問の要求から大きく外れてしまう。まずは、指定語句にとらわれず、純粹に設問の要求のみにこだわった構成を立て、後から、指定語句をその構成に取り込むように心掛けてほしい。

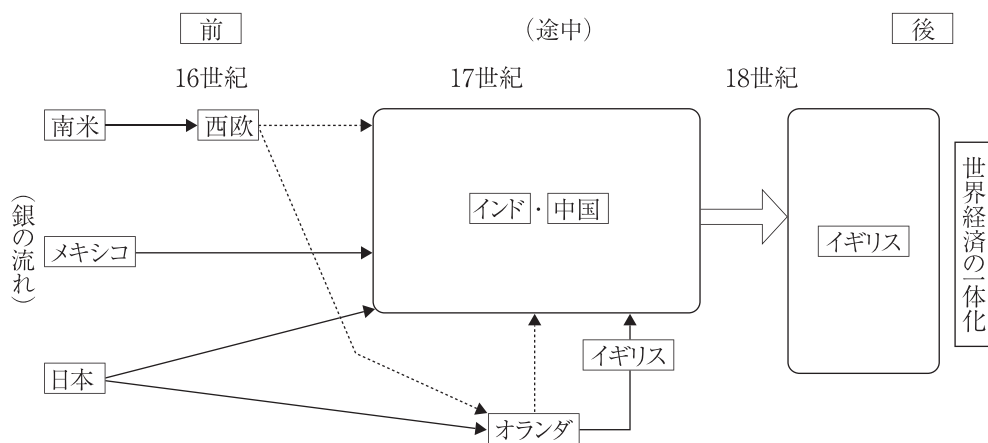
まずは、「16世紀」における銀を中心にした経済活動に関してまとめていこう。この時代、スペインによる中南米の植民地化が進み、当地で産出された金・銀の貴金属が大量にヨーロッパに流入した。その結果、西ヨーロッパ各国においては価格革命が発生し、物価の高騰とともに商工業の著しい発展がみられた。この影響から、西ヨーロッパにおける主要産業は農業から商工業にシフトしていき、食糧を東ヨーロッパ産のものを輸入することで確保するという体制が出来上がっていった。俗に言われる「東西分業体制」の成立である。このため、「銀」を基準通貨として、ヨーロッパ経済の一体化が進んだ、と指摘することができるだろう。また、ポルトガルによるアジア交易の発展は、これらの「銀」をアジア諸国にも流入させ、「銀」の増産を果たした日本産のものも、多くはヨーロッパ諸国の手によってアジア各地へと流入していった。その中でも、明王朝治下の中国では、銀の使用が一般化し、納税方法を銀納に一本化する一条鞭法が採用されたことは、これの証明ともいえるだろう。この流れは、16世紀末から17世紀前半にかけて、アジア交易の担い手がポルトガルからオランダに移ったのちも継続され、スペインによるカトリック信仰の強要に伴い商工業者の逃亡が顕著となったアントウェルペン（アントワープ）が没落した後は、オランダのアムステルダムが国際金融の中心となった。まさに、17世紀は“オランダの時代”であったのである。

ではこの「17世紀」の状況はどのようなものであったか。オランダは、東インド会社（1602年設立）を通じて、アジア香辛料貿易の実権を握った。ジャワ島のバタヴィアに商館を築いてのちのオランダ領東インドの基礎を固めたほか、台湾にゼーランディア城を築き、スペインを駆逐したのちは、日本との交易によって日本銀をも手中にし、世界交易の覇者として大いに発展した。インド産の綿布（キャラコ、キャリコと呼ばれる。ポルトガルのヴァスコ＝ダ＝ガマが到来したカリカットの名に由来する）、中国産の絹織物・陶磁器、東南アジア産の香辛料（胡椒を中心としたもの）などと、銀が交換されていくようになった。また、中南米においても、メキシコ銀の積み出し港であるアカプルコ、ポトシ銀山で産出した銀の積み出し港リマを中心に、アジアの産品が広く流通するようになった。ここに、オランダを中心に、銀をその交換手段とした「世界経済の一体化」が進んでいったのである。これは、3次にわたる英蘭戦争（イギリス＝オランダ戦争；1652～74）でイギリスが勝利し、18世紀に入って胡椒の需要が停滞して、オランダによるアジア交易が大打撃を受けるまで続くことになる。

最後に「18世紀」の状況であるが、オランダのアジア交易が衰退し、かわって、アフリカとアメリカ大陸との奴隷貿易の利権をポルトガルより奪ったイギリスが、大西洋三角貿易による富を独占することで世界経済の覇権を握ることとなった。イギリスは、17世紀に市民革命を経験し、中産階級（この段階ではジェントリなどの地主、東インド会社に代表される特権商

人が中心)が政治・経済上における主導権を獲得し、その利害に合った政策をスムーズに実行できたことで一気にその勢力を拡大した。イギリスは、大西洋三角貿易によってアフリカ・アメリカ大陸との結びつきを強めるとともに、インドの植民地化を推進して、この地との綿布交易を組み込んだため、三角貿易によって蓄積された銀はアジアへと流入し続けた。また、清王朝治下の中国との交易が拡大していったことは、この地もイギリスを中心とした世界経済の一体化に取り込まれていったことを示し、引き続いた大量の銀の流入が、地丁銀の採用を促したことで明らかなであろう。このような、世界経済の一体化が、イギリスにおける産業革命の背景の1つであり、当時需要の高かった綿布を自前で生産することを目的に、紡績・紡織過程の機械化が進展していったのである。さらに、18世紀末には植民地化したインドでアヘンを生産させ、これを中国に輸出することで、中国国内の銀を回収するに至った。イギリスを中心とした銀の流通による世界経済の一体化は完成したといっても過言ではないであろう。

以上のような各世紀の状況を概念的にまとめると以下のようなになる。



この図に、指定語句を含めて解説に示した項目を当てはめることで、解答を作成して欲しい。その際に気づくのではないかと思うが、提示された指定語句は、16～17世紀前半の状況を説明するものばかりで、17世紀後半～18世紀の状況を説明するものが欠けている。つまりは、18世紀を中心とした一体化の流れを説明するためのキーワード(“隠れ指定語句”ともいえる)は、君たち自身が見つねさねばならないということである。ここに掲げたような手順に従って解答を作成せずに、“指定語句に頼って”構成を立てると、16世紀の状況ばかりが詳しく説明されている“頭でっかち”な答案になってしまうのは必然であろう。この点は東京大学の設問の特色である以上、今後の演習の際には十分留意して欲しい。

■自習問題

解答例

問1.

アジアから交易網を通じ拡大した黒死病に起因し、ヨーロッパでは人口減少やユダヤ人迫害が起こった。中国も天災と疫病で混乱し、紅巾の乱を機に元は滅び明が建つ。日本でも南北朝の動乱が起き、海上交易の衰退で日本商船が倭寇と化し中国や朝鮮沿岸を襲った。(120字)

問2.

ドイツは三十年戦争で戦場となり人口が減少し、傭兵が都市や農村を襲い国土は荒廃した。イギリスではピューリタン革命での共和政樹立や名誉革命での国王交代など政治変動が起こる。フランスではフロンドの乱の後に王権強化が進みナントの勅令の廃止が決まると、ユグノーが多数亡命して経済的打撃を受けた。オスマン帝国は第二次ウィーン包囲の失敗やハンガリーの喪失で、ムガル帝国はアウラングゼーブのジズヤ復活が反乱を誘発し、ともに衰退へ向かい始める。中国では李自成の乱での明滅亡の後、清の侵入と鄭氏の反清復明運動が行われた。

(250字)

解説

《14世紀／17世紀の世界的危機》

字数制限や指定語句の使用という条件から、なにより発問事項から、答えは事実を羅列的に示すものになってしまうと思われる。しかし、問題のテーマ自体は確認しておく価値のあるものである。《14世紀の危機》と《17世紀の危機》という時代の特徴を広範な地域を対象にして考えるテーマは、世界史という科目の特性の1つを明確に意識させるものである。

問1. 問題文にあるように13世紀以降の「モンゴル帝国時代の交流の活発化がかえって危機の拡大を招いた」ことは《14世紀の危機》の背景として重要である。中央アジアに発生した黒死病(ペスト)は、「モンゴル帝国時代の交流の活発化」によりユーラシア大陸に拡大する。14世紀中葉にヨーロッパで流行したのみならず、中国やロシアでもペストは流行した。解答例では指定語句が「黒死病」であるのでヨーロッパでの人口減少を示した。また日常では覆われている心性が危機により表出した事例としてユダヤ人の迫害を加え、問われている「混乱」の一例とした。黒死病=ペストはユダヤ人が毒をまいたことで起こっている、との噂が広まりヨーロッパ各地でユダヤ人への迫害が加えられた事実は、高校教科書や資料集でも示されていることが多いので、この機会に確認しておくといえよう。

次にペストの中国での流行や北半球での気候の寒冷化という事実を、「中国も天災と疫病で混乱し」と表現して指定語句の「紅巾の乱」と結びつけた。元朝滅亡と明朝の建国という中国での王朝交代が、次の指定語句の「倭寇」と結びつく。

14世紀に倭寇が活発化する背景には、中国での王朝交代による政治混乱と日本での南北朝の動乱がある。日本の商船には護衛役として武士が乗船していた。14世紀中期～後期の中国側と日本側の混乱により海上交易が縮小に向かう中で、日本の商船は商業活動での損失を中国や朝鮮の沿岸部を襲撃すること(倭寇)で埋め合わせる事となる。この前期倭寇は日本人のみによる行為ではなく、中国人や朝鮮人の軍事集団も活動していたのは当然の史実であるが、解答例は120字におさめるために「日本商船が倭寇と化し」と記した。出題は「120字程度」

なので「日本・中国・朝鮮の商船が倭寇と化し」や「日本や中国の私貿易船が倭寇と化し」とすることもできる。

問2. ヨーロッパが《17世紀の危機》と呼ばれる混乱を経験したことは多くの高校教科書で示されている。それをヨーロッパのみならず広範な地域の巨大な危機として考えさせる点は興味深い。ただ発問事項から、解答は同時代の混乱・衰退を列挙すれば仕上がるであろう。そこで問1の《14世紀の危機》と問2の《17世紀の危機》との間の状況（もちろん受験世界史で学ぶ状況）を確認しておく。

14世紀に大規模な混乱を経験するが、15世紀には再び地域間の移動や交易が活発となる。特に海洋世界では15世紀前半に明の鄭和の艦隊による大航海があった。倭寇対策から海禁策を採った明であったが、朝貢貿易は奨励される。明との朝貢貿易で発展した代表として琉球が挙げられる。15世紀前半に成立した琉球王国は東シナ海と南シナ海の商業圏を結ぶ存在として中継貿易で栄える。琉球同様に明への朝貢を通じて栄えたマラッカ王国の存在も、確実に押さえない項目である。15世紀に東南アジア初の本格的イスラーム国家となったマラッカ王国は、インド洋のムスリム商人のネットワークとの結びつきを強め発展する。

15世紀末にヴァスコ＝ダ＝ガマの航海があり、16世紀に大航海時代（大交易時代）を迎える。上述のアジアに比べてヨーロッパは15世紀も混乱と停滞の状態を引きずった。そのヨーロッパが一転して大航海時代を迎えて、「拡大の16世紀」・「繁栄の16世紀」と言われる時代となる。新大陸からの銀が価格革命をもたらし、1571年のマニラ建設でアカプルコ貿易が始まり、明へ新大陸の銀が流入する。16世紀後半から17世紀前半には日本銀も加わり、これらの銀を介在させてアジア産品がヨーロッパへもたらされたことから、銀による世界経済の一体化が始まり、広まっていった。

15～16世紀に見られたこの交流・交易の活発化があったことが、《17世紀の危機》が広まる背景となる。問2の問題文にあるように「過剰な銀の流通による貨幣価値の混乱などを背景とするこの危機は全世界的なもの」となってゆく。

解答例は250字でおさめてみた。出題は「250字程度」なので、指定語句とは直接関係しないが、英蘭戦争（イギリス＝オランダ戦争）後のオランダの後退を書いてもよからう。

解答例は、一定の考え方によって導かれたものである。ゆえに前提（問題の読み取り方）が異なれば、千差万別の解答が出てくることはいうまでもない。解答例や別解を鵜呑みにしないように。あくまで解答にいたるプロセスの一例である。



会員番号	
------	--

氏名	
----	--